

H.G.ウェルズのユートピアと優生思想

愛知県立大学外国語学部英米学科

小澤正人

始めに

「ユートピア」と「共生」は相互に関係する語ではあるが、必ずしもイコールで繋がってはいない。ユートピアを描く作品群において「共生」はなかなか難しい問題である。

対外的にみて、ユートピア的な共同体がその外の社会と共存していることは少ない。(完全な共存が成立しているならそれは既に「外」ではなく同一共同体内にある。)プラトン Plato の『国家』*Republic* (c. 380 BC)は当時の都市国家を前提としており、周囲の敵対的都市国家から自己を守るため「守護者」が重要な存在となっている。モア Thomas More の『ユートピア』*Utopia* (1516)でも周囲の諸国家との緊張関係や、どのように戦争を行うかが詳述されている。ブルワー＝リットン Edward Bulwer-Lytton の『来たるべき種族』*The Coming Race* (1871)では強大なエネルギー「ヴリル vril」を操る人々の住む地下世界が描かれているが、彼らは周辺のヴリルを持たない種族を野蛮人とみなし、敵対する時には躊躇なく絶滅させてしまう。一方、ベーコン Francis Bacon の『ニュー・アトランティス』*New Atlantis* (1627)は大洋中の孤島であり、ヒルトン James Hilton の『失われた地平線』*Lost Horizon* (1933)におけるユートピア Shangri-La はヒマラヤの奥地に作られ、共に外界との接触を断っている。

またユートピア的な作品群で描かれる社会は内的にも分離していることが多い。効率的運営のために、管理者と管理される大多数の住人に分かれていることはよくあるし、『国家』や『ユートピア』には奴隷が存在する。

この点についてあらかじめ結論を述べておけば、「共生」は共同体内での複数の集団の併存を前提とするのに対し、ユートピアは内部の均質性、一体性を求めている点に相違があるといえよう。

本論では優生学とユートピアの関係を共同体の均質化の問題として考えていく

1.

ウェルズ H. G. Wells の代表的ユートピア小説『モダン・ユートピア』*A Modern Utopia* (1905) ではすでに「世界国家 World State」が完成しており、対外的問題はない。(もともと、『宇宙戦争』*The War of the Worlds* (1898)のような地球外からの脅威はあるかもしれない。)世界国家では何よりも個人の自由が重視されている(ch 2, また Hillegas xiii)。本論では、個人の自由と共同体の秩序と効率的運営の関係を、共同体の均質化と「改良」を目指す優生学の観点から考えてみたい。

「ユートピア」と「優生学」が頭韻になっているのは偶然であるが、“utopia”と“eugenics”が同音で始まるのは偶然ではない。トマス・モアが『ユートピア』執筆にあたって作った“utopia”という語は、「無い場所 ou-topia」であると同時に「よい場所 eu-topia」でもあった。一方“eugenics”はフランシス・ゴールトン Francis Galton が一八八三年に使用した造語である。

Richardson はこの語がギリシア語 “eugene”から作られ、“good in stock”を意味するとして以下のゴールトンの説明を引用している。

the science of improving stock, which is by no means confined to questions of judicious mating but which, especially in the case of man, takes cognisance of all influences that tend in however remote a degree to give to the more suitable races or strains of blood a better chance of prevailing speedily over the less suitable than they otherwise would had. (*Inquiries into Human Faculty*, 24) (Richardson, 2)

またケヴルズ Danel J. Kevles は“‘good in birth’ or ‘noble in heredity’” (Kevles, Preface) を意味するとしている。OED によれば形容詞 “eugenic”は “Pertaining or adapted to the production of fine offspring, esp. in the human race.”で、“eugenics”は “[after analogy of economics, politics etc.] The science which has this for its objects.”である。

優生学にもユートピアにも共通して、個人と共同体の相克が影を落とす。

優れた人間集団を人為的に作っていくのが優生学であり、良い生活を保障する場あるいは共同体がユートピアである。一般論として、自分の属する集団がより優れた人間の集団となるか、今よりもっと良い生活を送れる、ということに反対するのは難しい。例えば、「貧しい生活のほうが優れている」といった考えも、つまりそれは悲惨な生活ではない貧しさ、肯定的に言えば「質素だが平等」「豪華ではないが十分」といった考えに基づき、それが良い生活だということになる。

優生学には積極的優生学 positive eugenics と消極的優生学 negative eugenics がある。前者は「望ましい」人間を増やすために「優秀な」男女による出生＝再生産 reproduction を奨励し、極端な場合には強制的な結婚を命じる。後者は「望ましくない」人間を減らし、最終的にはゼロにすることを目指す。結婚や子供を作ることを禁じるものから、断種、更には処刑に至ることもある。『優生学の名のもとに』の訳者西俣総平は後者に対し、消極的という語には何もしないような語感があるが、断種や出生抑制に「きわめて行動的であり、積極的に障害者を排除し社会的弱者を蔑視する優生思想」(521)があるとして「禁絶的優生学」という訳語を使用している。

また、ユートピアと言われて、健康で美しい人々が理性的に暮らしている(逆に言えば、ある基準に満たない人々が暗黙のうちに排除されている)社会を想像するならそこにはすでに優生学的な志向が隠されているといえる。

優生学を考えるうえで問題となるのは、「優れている」とか「良い」という抽象的な語が特定の個人や団体によって具体的な特徴として示され、往々そのみが許されるような場合である。本論でも「優れた」や「良い」という言葉を使わざるを得ないが、それは何らかの特定の状況や特徴を指すものではなく、優生学支持者の視点からの、時代的・文化的背景に強く依存する言葉であることをあらかじめ述べておきたい。

モアの『ユートピア』も家父長制的管理社会であり、かなり自由を制限されているとする批判は多い。(囲い込み運動により「羊が人間を食う」(74)と言われた状況では最低限の衣食住が保証されているだけで楽園だったのだろうが、現代の日本人がそこで暮らしてユートピアと思う

かどうかは難しいだろう。)この社会では、家畜の交配を念頭に、結婚前に女性が全裸を見せて健康を確認するという習慣がある。また、カンパネッラ Tommaso Campanella の『太陽の都』*La Città del Sole* (1623)では優れた男女を結婚させるなどの優生学的政策が実施されている。また、ユートピアは、エリート的指導層と管理される一般人からなり、住人は良き歯車としての幸せを与えられるという見方は可能であり、それが悪いほうに強調されればザミャーチン Yevgeny Zamyatin の『われら』*We* (1921)やハックスリー Aldous Huxley の『素晴らしい新世界』*Brave New World* (1932)やオーウェル George Orwell の『1984年』*Nineteen Eighty-Four* (1948)のようなアンチ・ユートピアとなる。

ユートピア作品の歴史において、19世紀におけるダーウィン Charles Darwin の進化論の登場は重要であり、これによりモアやカンパネッラの経験的な結婚政策が進化論に基づけば「科学的根拠」を持つこととなるのだが、この「科学的」という言葉が大きな問題であるのは言うまでもない。

2.

優生学が「優れた」民族を作ることを目指し、それが、例えば、ナチスドイツによるユダヤ人虐殺を生んでしまったことは良く知られている。

ゴルトンに始まる優生学は19世紀末から20世紀前半において政治家、社会改革者、女性参政権主義者、社会主義者などから多くの賛同者を得て、各地でそれを推進する運動がすすめられた。ウェルズの名も常にあげられている。(ここでは詳述しないが、以下の優生学の歴史については、第二次世界大戦後の状況やいわゆる「新優生学」も含め、Kevles、トロンブレイ、Levineなどを参照されたい。また、19世紀末の“New Women”との関係についてはRichardsonが、フェミニズムと産児制限の関係については荻野が詳しい。)ウィーン Francis Weenも『モダン・ユートピア』への序文で、優生主義者は進歩主義者で社会主義者であったと述べている(xvii)。

Levineはこの理由の一つに世紀末に広まった「退化 degeneration」への恐怖、下層階級の多産性への不安を挙げ(27)、“the moral imbecile”という範疇が作られたとする。後者は“the moral imbecile who was unable to distinguish right from wrong and for whom punishment was thus no deterrent” (28)と述べられている。ウェルズの *Anticipations* や *A Modern Utopia* では、Victoria Claflin Woodhull の “Rapid Multiplication of the Unfit”という言葉に影響されすぎているという批判がなされている (*Anticipations* 253、*A Modern Utopia* ペンギン版 100)。

Turdaはmodernityが種族の再生と健康を求めるものとし、ヨーロッパの優生学は以下の3つの原則に基づいていたと述べる。

first, the crucial role of heredity in determining the individual's physical condition; second, the link between biology, medicine and the health of the nation; and, third, the politicisation of science. (7)

この点で優生学はヨーロッパの近代における重要な一面であり、“an idealized national community”を再生するために個人と国家を結び付けるものであり(8)、また科学的知識が不

可欠なものであった。彼はさらに後者に関して当時の“scientism”がこれと強く結びついていると論じている(ch 1)。

ウェルズもこうした流れの中にいたのは明白である。例えば『タイム・マシーン』*The Time Machine* (1895)におけるエロイとモーロックの描き方には、退化や下層階級への恐怖が見て取れる。ハインズ Roslynn Haynes は、科学者としてのウェルズ、T. H. ハクスリーを尊敬し生物学と進化論を学んだウェルズに注目し、秩序と効率を重視する彼の志向が SF 的作品やユートピア的作品に強く表れていると論じている。

3.

優生主義による制度はナチスドイツのユダヤ人虐殺や障害者断種だけではなかった。20世紀前半、欧米では優生学思想に基づく「不適格者」の隔離や断種が行われていたし、戦後にもそれは続いていた。米本は『優生学と人間社会』でこう述べる。

第二次世界大戦の戦後処理の過程では、ナチズムの悪とは、暴力的な政治体制とユダヤ人などの大量虐殺を指していた。大規模に行われたナチスの断種政策は、確かに他の国と比べれば極端なものではあったが、実際には似たような「保健政策」は、他の国でも実施されていた。断種政策は、50-60年代には、まだ「問題」として見えていなかったのである。(米本他、終章、238)

彼によれば、1970年前後に優生学が「否定的に再発見された」(238)。それをもたらした60年代における状況の変化に以下の3点を挙げている。①公民権運動による社会的マイノリティ(障害者、同性愛者など)の権利確立運動。②科学技術一般や専門研究者に対して厳しい目が向けられた。③分子生物の発展により遺伝の基本原則が分子レベルで明らかにされた(238-39)。更に彼はそこから生じた「危機イメージとしての優生学」について述べる。

再発見されたナチス優生学は、70年代以降、先端医療やバイオテクノロジーの研究で新しい展開があるたびに、批判の枠組みの基準点の役割を果たすことになった。そしてこのようにして成立したナチズム=優生社会=悪の極北という図式は、研究や技術使用の場面にナチス優生政策との類似点を見つけ出し、そこに危険が含まれることを喚起する機能を果たすことになった。このような機能をもった優生学を「危機イメージとしての優生学と呼ぶことにする。(240)

米本は、『優生学と人間社会』が、優生学は「『合理的な近代化政策』の一種」(278)であったことを論証したものであり、「優生学的危機と言われてきた問題の核心を、二一世紀社会に向かってどう有効かつ過不足ないかたちで漉しとることができるか」(278)が「われわれに課せられた課題」であると述べている。

過去の出来事を単純に現在から批判・断罪するだけにとどまらず、その過去の状況において考察し、また現在を考察する判断材料とすることが、こうした研究に求められている。科学史の研究について坂野は「村上陽一郎の科学史方法論」でこう述べている。「だが、現在の価値観で過去を裁断してはならない、という言明には限定がつく。こうした言明を無際限に認めてし

まうと、それは、例えばホロコーストや従軍慰安婦の正当化にもなりうるからだ(194)。村上陽一郎はこれへの返答「批判にこたえて」で、今「悪」とされるものがかつてある人たちにとっては「善」であったのは確かで、「現在の私たちが、過去から学ぶべきことがあるとすれば、人間というものは、『場合によっては』そういう価値観を持ち合わせることができる存在なのだ、という決定的な事実である」(400)と述べている。

60年代、70年代には生殖や遺伝に関する研究が進み、それに基づく新しい生殖医療や遺伝子工学が生まれてくる。ヒトゲノムの解明、出生前検診、遺伝子改変、デザイナー・ベイビーなど問題が生じ、新優生学と呼ばれる状況ができてきた。それに伴い優生学研究も新しい視点からの行われるようになる。

ケヴルズの『優生学の名のもとに』は1985年出版だが、彼は序文で、遺伝子操作の研究に関する議論に優生学が暗い影を落としていることに気づき、歴史的研究をもとに、生じつつある様々な問題と可能性に有益な議論を示すと述べている。

それまでの優生学の問題点が、国家政策のように、個人に対する共同体からの強制にあつたとすれば、新優生学的な問題は、個人が妊娠、出産を管理、操作できるようになったこと、また企業による営利的な関与が生じうようになり、また経済格差と直結したということであろう。(こうしたことから生じる問題は多くのSFやアンチ・ユートピアで頻繁に描かれているのだが、ここでは取り扱わない。)

本論との関係でいうと、ケヴルズや以下に挙げるトロンプレイ Steven Trombley の著書は優生学に関する一般的関心を引くのに力があつたが、そこでは往々にしてウェルズが優生学支持者として強く批判されている。19世紀末から20世紀初めに優生学に賛同した人は多いが、ウェッブ夫妻、G. B. ショー、そしてとりわけ H. G. ウェルズはその知名度から大衆に分かりやすいターゲットだったといえよう。

例えば、トロンプレイは『優生思想の歴史』中でウェルズによる「欠陥者の断種」などのことを引用し、『モダン・ユートピア』から「本当に劣っている人種に対する唯一のまともで論理的な手段は、彼らを根絶やしにすることだ」という文を引用している(56)のだが、『モダン・ユートピア』を見ると、これは実在の特定の人種を皆殺しにするという意味ではない。「仮にすべての点で劣る人種がいたら」の話であり、その場合には結婚に関する法律と最低限給与の制度でいなくなるだろうと述べ、しかも後のところではそもそも本当に劣った人種などないと書いている(ペンギン版 224-25)。

4.

1960年代から70年代は、SFやユートピアの研究が学問的研究として注目を集めた時期でもあり、それに付随するようになつてウェルズ研究が盛んになり始めた。例えば、Bernard Bergonzi, *The Early H. G. Wells* (1961)、W. W. Wager, *H. G. Wells and the World State* (1961)、Mark Hillegas, *The Future ad Nightmare: H. G. Wells and the Anti-Utopians* (1967)、Patrick Parrinder, *H. G. Wells* (1970)、MacKenzies, *H. G. Wells: Biography* (1973) など。これについては宋による説明(13-14)が分かりやすいのでそちらを参照されたい。しかし、優生学批判が広まり始めていたにもかかわらず、ユートピア研究やウェルズ研究では彼の優生主義についてはあまり触れられないか、多分に弁護的になされていた。

例えばマニュエル夫妻 Frank Manuel & Fritzie Manuel の大部なユートピア研究 *Utopian Thought in the Western World* では索引に優生学の記載がなく、カンパネラについて優生学的とあるだけだし、そもそもウェルズ達のダーウィン進化論以後のユートピアについてはごくそっけない。同じく大部のクマー Krishan Kumar の *Utopia and Anti-Utopia in Modern Times* にも索引に記載がなく、ウェルズの『モダン・ユートピア』の説明で簡単に触れているに過ぎない。近年の著作には多少詳しく論じるものもある。例えばラックハースト Luckhurst やクレイズ Claeys。ブッシュ Justin E. A. Buschha は、ウェルズを優生主義とする批判には妥当で説得力もあるかもしれないが、ウェルズの全体像を見ればそれだけではないことがわかる、ウェルズは優生主義者として不当に強い非難を受けていると述べている(40)。始めに述べたようにユートピア思想はプラトン以来優生学を明示的・暗示的に含んでおり、ユートピア研究者は「優生学＝悪」の観点からこの問題に触れることに躊躇しているのではないかと思われなくもない。なお、SF 論では優生学は遺伝子工学などの流れにつながるアンチ・ユートピア的議論で述べられることが多い。

5.

5.1 *Anticipations*

本論と関係するウェルズの著作として『モダン・ユートピア』に加えて、ここでは『予測』 *Anticipations* (1902)、『神々のような人々』 *Men Like Gods* (1923) を取り上げる。(なおウェルズの作品とユートピアについては小澤の論文参照。)

『予測』は小説ではない。全題名を *Anticipations of the Reaction of Mechanical and Scientific Progress upon Human Life and Thought* といい、1901年に雑誌 *Fortnightly Review* に連載された未来予測エッセイである。この作品と『モダン・ユートピア』はよく似た構成をとっており、科学技術の進展によってもたらされる快適で利便性に満ちた生活を描き、その社会での中心となる、科学や科学技術に関心のある新しい中流階級の出現とそこから生まれる「新しい共和国 New Republic」(227)の成立、そうした人々に導かれる理性的で効率的な社会を描く。読者を説得するこの手順はウェルズだけでなく広くユートピア的作品に共通するものともいえよう。

当時の優生学の観点からは、ある種の心身の障害、知的発達の遅れ、暴力癖、過度の飲酒癖などは遺伝的なものだと考えられていて、それによってその人自身が苦しみ、家族の負担ともなり、また国家への負担でもあると論じられていた。

「新しい共和国」では優生学的政策をとり、その倫理的制度 *ethical system* の原則は彼らの考える「望ましい人々」を増やし、「望ましくない人々」を減らすことにある。

[The] ethical system (. . .) will be shaped primarily to favour the procreation of what is fine and efficient and beautiful in humanity—beautiful and strong bodies, clear and powerful minds, and a growing body knowledge—and to check the procreation of base and servile types, of fear-driven cowardly souls, of all that is mean and ugly and bestial in the souls, bodies, or habits of men. (257)

後者の対象となる人々は、“the small minority, for example, afflicted with indisputably

transmissible diseases, with transmissible mental disorders, with such hideous incurable habits of mind as the craving for intoxication” (258) であるが、将来は医学 medical science が進み、出生に関する諸状況はもっとはっきり分かるようになるだろうと付け加えられている。こうした人々は「色欲を抑えきれないこと incontinence と愚かさ stupidity」(257)から生まれるものであり、こうした人々をなくすことは苦痛の排除とされる。

In the new vision death is no inexplicable horror, no pointless terminal terror to the miseries of life, it is the end of all the pain of life, the end of the bitterness of failure, the merciful obliteration of weak and silly pointless things. (257)

彼らは「憐れみと忍耐」により、また増えないだろうという考えから許容されているが、その許容が濫用される時には、「新しい共和国」の人々は彼らを殺すだろうと述べられる。“I do not foresee any reason to suppose that they will hesitate to kill when that sufferance is abused.” (258)

Anticipations では「新しい共和国」は福祉国家であり、出産 reproduction について、つまり積極的優生学についても述べられている。また、効率的な母親は国家にとって重要な人間として高く評価される。“[The] efficient mother who can make the best of children is the most important sort of person in the state.” (267)

このように本作では消極的優生学がかなり強く主張されており、後代の論者から批判されるのも不思議ではない。

ただ、生物学とダーウィン進化論に造詣の深かったウェルズは社会進化論的観点を批判し、不十分な基盤に基づく優生学に留保していた面も多い。この巻に収められた論文 “The Problem of the Birth Supply”は *Mankind in the Making* (1903) の第2章であるが、優生学についての語調はやや異なる。彼は、プラトン以来の「劣った人を減らし、優れた人を増やす」(309)という考えの難点について論じている。問題は、“the gaps and difficulties that intervene between the general proposition and its practical application by sober and honest men.” (309)にある。動物の品種改良と異なり、人間の場合にはうまくいかなかった個体を処理して済ますわけにはいかないし、多様性も必要である(311)。また beauty とか healthy と言っても具体的にどのようなことなのかについては意見が分かれる。ゴールトンの考えとは違って、獲得形質は遺伝しないのだから簡単に種を改良することはできない(318)。「遺伝的な形の不健康 hereditary forms of ill-health」(318)はあるだろうし、それを減らしていくこともできるだろうが、それが何で、どう取り扱うべきかの具体的条件についてはわからない。「完全な」健康といった問題についてはまだ科学の名に値するかがかかがないのだ(319)とも述べている。

消極的優生学は支持されており、進化論的に大事なのは選択的交配ではなく、平均以下の個体の死である(320)と述べるが、同時に、「犯罪性 criminality」は遺伝以外の要素とも関係しているだろう(323)とか、過度の飲酒癖も遺伝であるかどうかははっきりしない(329)とし、また狂気 madness が家系的、遺伝的なものという議論は不十分であり精査に堪えないだろう(329—30)とも述べている。

しかし、この留保が『モダン・ユートピア』ではあまり明確になってはいない。

5.2 *A Modern Utopia*

『モダン・ユートピア』の全体的な検討は他のところでしたので簡単に触れて、本論では優生学に関する部分について述べていくことにする。引用の頁はペンギン版による。

なお、原題 *A Modern Utopia* の不定冠詞を考えると実際にはこの作品を「現代のユートピアの一案」と読むことができる。ウェルズのようにユートピアやアンチ・ユートピアと関係する作品を多く書いた作家については、どれか一つの作品をそれがその人の思想を示していると論じるのは正確ではない。また、ユートピア小説については、それが虚構の作品であり、作者自身の社会改造計画の具体的設計図とみなすのは短絡的であるということは、ユートピア批評において重要な視点であることは言うまでもない。ペンギン版の序文でも、ウィーン Francis Wheen はウェルズがどこまで真剣 serious だったのだろうかかと述べている(xxii)。

この作品の舞台となるユートピアは宇宙のシリウス星のかなたにあり、全惑星は単一の「世界国家 World State」になっている。ここは地球とまったく同じ世界であり、地球にいるのとまったく同じ個人が暮らしている(23)。ただ、ここではその住人はユートピアに生まれ育ったらこうなるであろうという存在となっている(23)。このかなり矛盾のある設定は、われわれが今住んでいる世界のユートピア的な別のありようと、そこでなら今の自分はこうなりうるのだということを具体的に提示しようという試みである。

このユートピアは、常に上昇を目指す動的 kinetic なユートピアである(11)。近代になって生まれた個人の自由という観念は人間の幸福と不可分であり、ここではそれが最大限に保障されている(13)。労働の軽減に科学技術を積極的に利用し、それによって労働者階級は存在しなくなっている(73)。まとめると次のようになる。

The State is for Individuals, the law is for freedoms, the world if for experiment, experience, and change: these are the fundamental beliefs upon which a modern Utopia must go. (66)

このユートピアは「サムライ Samurai」と名付けられた「自発的貴族階級 voluntary nobility」によって管理、運営されている。彼らは世襲制ではなく、志願した肉体的、精神的に健康な人間からなり、教育、健康、信条などにおける厳しい条件を満たさなければならない。より良い状態を目指す動的ユートピアでは将来的には構成員の全員がこの「サムライ」のようになるべきだから、そこには暗黙のうちに優生学的な方向性が生じるし、このユートピアでは優生学的な制度が実際に実行されている。

『モダン・ユートピア』は始めに「声の主」という章があり、作品中の語り手「私」は「声の主」を書いている人間ではないと主張している。この「私」は描写からするとウェルズに似たところがあるが、あくまで作品中の登場人物であり、彼が作品と自分を分離するためにこの説明をつけていると思われる。ともかく「私」は友人の植物学者とともに忽然とこのユートピア世界に転移してしまう。

彼は「モダン・ユートピアにおける不適格者 failure」に関する章で、このユートピアについて、地球とまったく同じ人間がいる以上同様に「優れた人」や「劣った人」がいるが、ユートピアとして道徳的、精神的、肉体的改善を経ているだろうとして、以下のように述べる。

[It] is our business to ask what Utopia will do with its congenital invalids, its idiots and madmen, its drunkards and men of vicious mind, its cruel and furtive souls, its stupid people, too stupid to be of use to community, its lumpish unteachable and unimaginative people? (95)

更にこれに続けて、あらゆる点で「劣った poor」無気力で無能な低級の人々をどうするかと問う。

彼は、ダーウィン進化論では適者生存と生存闘争が中心になり、環境に適応できない不適格者として脱落するが、人間は自然界に対する「反逆者 the rebel child of Nature」(96)であり、弱者を助けることのできるのだという。「世界国家」は福祉国家であり、一定の生活水準を保障し、仕事を与える。ただ、こうした人々は子供を作ることは認められない。しかし、これ以外の人々もいる。

There remain idiots and lunatics, there remain perverse and incompetent persons, there are people of weak character who become drunkards, drug takers, and the like. Then there are persons tainted with certain foul and transmissible diseases. All those people spoil the world for others. (99)

ここでは、先に見た遺伝的不適格者についての留保は見られず、(当時の優生学支持によくみられるが)かなり独断的に規定されているように見える。

こうした人々については「社会的外科手術 social surgery」(99)に頼ることとなる。特定の島に隔離するのである。これは刑罰ではなく矯正学校であり、国家は出生時の奇形や重病者を除けば全員の生活を保障する。死刑も処刑室 lethal chambers もない(100)。犯罪と悲惨な生活は国家の失敗を示す物差しである。こうした島では同じような犯罪傾向を持つものが集まって暮らすことになるが、島にいる限りでは自治が認められている。

このような提案の恐ろしさは、その実施が「厳しく、感受性がなく、残酷な管理者 hard, dull, and cruel administrators」(100)の手に落ちたらどうなるだろうかということだと彼は自問し、いや、ユートピアでは可能な限り最良の政府、強力で決断力を持つと同時に慈悲深く慎重な政府があるだろうから、誤った人間によって管理される心配はないと自答する(100)。

この論理はユートピア思想にしばしば見られる理性への信頼の表れでもあるが、自分は理性的で善意で行動していると考えた人間の場合には容易にアンチ・ユートピアにつながるものであり、ユートピア思想(および、この場合には優生学の論理)の危うさを示しているものでもある。ただし、ここでは詳述しないが、ウェルズは nature と nurture の対立を強く意識しており、『予測』や『モダン・ユートピア』でも、教育によって人間の愚かさを克服することを積極的に論じている。

(この隔離の例は、自由こそ人間に不可欠とするこのユートピアにおいても、他者や共同体に害を与えるような場合には制限されるべきだという原則があること、また、十分に理性的な人々であれば、共同体で暮らす上で、自発的に自己の自由を制限しようと考えているということを示している。このような形で共同体を個々の構成員より優先することは、まず共同体ありきと

するユートピアにはしばしば見られる。個人の自由と共同体の葛藤は次で述べる『神々のような人々』では構成員全員が十分に理性的に考え、行動できるから解決されているということになる。)

ウェルズは『自伝の試み』*Experiment in Autobiography* (1934)において『予測』や『モダン・ユートピア』では肯定的優生学を取り入れないようにしたと述べている(561)。これが特に述べられているのは、先に述べたように『モダン・ユートピア』では自由が最重要とされているからである。肯定的優生学は往々にして国家による結婚の管理や強制的結婚が論じられることがあり、それはここでは許されるべきではなかったのである。

彼は『自伝の試み』でもこの作品を『アン・ヴェロニカ』*Ann Veronica* (1909)などの性に関する問題を扱った作品とともに論じている(394)。この自由な恋愛関係の重視は、何度も「不倫」を重ねたウェルズの個人的意見でもあろう。彼の二度目の結婚を女性側から描いたともいえる面を持つ『アン・ヴェロニカ』では、女性から愛を告白する女子大学生 *Ann Veronica* を描き、当初は出版を拒否され、出版後も強い批判を受けた。その端的な形は『彗星の時代』*In the Days of the Comet* (1906)にも表れている。この一種のユートピア小説では、宇宙から飛来した彗星の尾部に含まれたガスが地球を覆うことにより人類はより理性的存在として覚醒するが、その最終部では複数の男女による自由恋愛が肯定されている。

先に述べたように、『モダン・ユートピア』では、たとえ処刑や中絶が認められていないにせよ、消極的優生学がかなりはっきりと描かれている。それは、ウェルズが、何を世界からなくすべきかについては具体的に意識していたということである。

少し違う例になるが、このユートピアには家畜や愛玩動物がほとんどいない。彼らは市内での馬車馬の糞を嫌い、病原菌を運ぶ動物や愛玩動物の存在を許さない。「私」はそれをきわめて理性的、効率的な考えとして支持し、「犬のいない世界」を感傷的に否定する植物学者を愚かさ *stupidity* にとらわれた子供のようにだと批判する。

(この作品での「私」はユートピアの代弁者として、理性・効率重視の立場をかなり強く表しているが、同時に小さく、太った地球人であり、ウェルズの戯画的面も持つ。ウェルズは作中で自分を「私」とユートピアのもう一人の「私」とに分け、更には、「私」と「植物学者」にも分けている。「私」対「植物学者」や、「ユートピア的理性」対「小説的感情」の対立については『モダン・ユートピア』に関する拙論を参照されたい。)

“The Problem of the Birth Supply”における留保などを考えると、ウェルズ本人の考えが、このユートピアと「私」そのままであるとは思えないが、少なくともこの作品では、彼は、ある種の不適格者を遺伝的原因によるものとして、優生学に基づく方策でそうした人々を排除しようという考えを提示していると読むことができよう。ただし、既に述べたように、多くの精神病、精神障害や過度の飲酒癖などを遺伝的なものとみなすのは当時の優生学者にとっては科学的に当然なことであった。

5.3 *Men Like Gods*

『神々のような人々』は『モダン・ユートピア』より20年ほど後の1923年に発表された。このユートピアはパラレル・ワールドか異次元のようなところにあり、作品は他の地球人と共の偶然その世界に移動してしまった男バーンスタプルによって語られている。この世界は、常に進展する『モダン・ユートピア』がずっと未来まで発展した形であると言えよう。理性が自然を支配した

世界である。

We have, after centuries of struggle, suppressed [Mother Nature's] nastier fancies. . . . With Men came Logos, the Word and the Will into our universe, to watch it and fear it, to learn it and cease to fear it, to know it and comprehend it and master it. . . . Every day we learn a little better how to master this little plane. Every day our thoughts go out more surely to our inheritance, the stars. (107-8)

ここには指導者層と被指導者層という対立はない。全員が理性的にかつ自由に生きており、管理と個人の自由の相克という問題もない。“[The daily life of this world] is a life of demi-gods, very free, strongly individualized, each following an individual bent, each contributing to great racial ends.” (285)

この世界は健康で美しく理性的な人間だけが住んでいる。ユートピアが成立まで 500 年、政治、商業、競争がなくなって 1000 年以上、優生学を始めてまだ 12, 3 世紀という時代にある。ウェルズは人間が進化と戦うにはこのくらいかかると考えていたのであろう。

ここでは優生学的な施策についての詳細はなく、むしろその結果が描かれているのだが、ユートピアの成立に優生学は必要だとウェルズが考えていると読むことができよう。

終わりに

多少繰り返しになるが、ユートピアと優生学の問題にからめて 2 点まとめておきたい。

作品を作者から切り離すことは現代批評にあつては常識であるが、ユートピア作品のようなメッセージ性が強いと思われる分野にあつては、作者の意図をある程度考慮に入れる読み方も必要となる。ユートピアと優生学の関係について言えば、優生学を支持する人間が優生学的制度をとる社会を書いた場合、その作品での議論を作者の考えとみなすこともある程度当然であろう。だが、すでに述べたように、虚構としてのユートピアで述べられたことは作者自身の考えとイコールとは言えない。まして、作中人物の考えを著者の考えと無批判に同一視することには問題があるだろう。具体的に言えば、ウェルズはその時代的・文化的環境の中で優生主義をある程度支持したが、生涯一貫して教育による改革の道を強く主張し、啓蒙的著作も多く表している。確かに『モダン・ユートピア』には優生主義に基づく制度が述べられているが、それだけをもとに、あるいは特にその一部を取り出して、彼の思想を論じるには慎重であるべきである。

今のべたように、彼は生まれ育った時代的・文化的環境の中で、つまりその時代の生物学的、遺伝学、政治思想などの範囲内で思想を形成し、その範囲内で優生主義をよりよい社会を作るのに有効で正しいものと判断した。1946 年に死亡した彼は、第二次世界大戦末期のドイツの状況を十分には知らなかっただろうし、戦後の議論も当然知らない。始めに述べたように、後世の知識で単純に過去を断罪することは、現在の『正しさ』を無意識的に受け入れてしまうことになりかねない。だが、逆に過去においてはそれが正しいとされていたのだと受け入れてしまうのは危険である。『モダン・ユートピア』を論じるのは、その優生学的制度を悪として批判するだけでなく、彼がどこで、何故、その方向に進んでしまったのかを見極めることである。ユートピアやアンチ・ユートピアや SF に描かれた未来社会や異世界を、実は作者の世界を比喩的

に描き出しているものでもあるとする読み方は今日よく論じられるものではあるが、それは当然今のこの自分たちの考え方、世界観が同じように今の時代的・文化的環境にとらわれていることを意識することでもあらねばならない。その時、この今が唯一の基準などではなく、様々な可能性の平行・ワールドの一つにすぎないことがわかるのである。

参考文献

- Busch, Justin E. A. *The Utopian Vision of H. G. Wells*. Jefferson, North Carolina, and London: McFarland & Company, 2009.
- Burdett, Carolyn. "Introduction: Eugenics Old and New." *New Formations: A Journal of Culture/Theory/Politics*, no.60, Spring, 2007, pp. 7-12.
- Claeys, Gregory. *The Cambridge Companion to Utopian Literature*. Cambridge: Cambridge U P, 2010.
- Haynes, Roslynn D. *H. G. Wells: Discoverer of the Future: The Influence of Science on his Thought*. London & Basingstoke: Macmillan, 1980.
- Hillegas, Mark R. "Introduction" to *A Modern Utopia* (Bison Books).
- Kevles, Daniel J. *In the Name of Eugenics: Genetics and the Uses of Human Heredity*. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1986.
- Kumar, Krishan. *Utopia and Anti-Utopia in Modern Times*. Oxford: Basil Blackwell, 1991.
- Levine, Philippa. *Eugenics: A Very Short Introduction*. New York: Oxford U P, 2017.
- Levitas, Ruth. *The Concept of Utopia*. Hertfordshire: Syracuse U P, 1990.
- Manuel, Frank E. and Fritzie P. Manuel, *Utopian Thought in the Western World*. Cambridge, Mass.:The Belknap P of Harvard U P, 1979.
- Smith, David C. *H. G. Wells: Desperately Mortal: A Biography*. New Haven and London: Yale U P, 1986.
- Pintér, Károly. *The Anatomy of Utopia: Narration, Estrangement and Ambiguity in More, Wells, Huxley and Clarke*. Jefferson, North Carolina, and London: McFarland & Company, 2010.
- Richardson, Angélique. *Love and Eugenics in the Late Nineteenth Century: Rational Reproduction and the New Woman*. Oxford: Oxford U P, 2003.
- Wagar, W. Warren. *H. G. Wells: Traversing Time*. Middletown: Wesleyan U P, 2004.
- Wells, H. G. *Anticipations*. The Works of H. G. Wells (Atlantic Edition) vol. 4. New York: Charles Scribner's Sons, 1924. (Reprint. Tokyo: Hon no Tomosha, 1997.)
- . *Experiment in Autobiography: Discoveries and Conclusions of a Very Ordinary Brain (Since 1886)*. Boston and Toronto: Little, Brown and Company, 1962.
- . *Men Like Gods*. New York: Macmillan, 1923.
- . *A Modern Utopia*. Lincoln: U of Nebraska P, 1967.
- . *A Modern Utopia*. London: Penguin Books, 2005.
- 小澤正人. 「H. G. ウェルズの『モダン・ユートピア』とユートピア思想」. 『愛知県立大学文学部論集(英米学科編)』第 39 号、1990.
- . 「*Men Like Gods* とユートピア思想」. 『中部英文学』(日本英文学会中部地方支部)、1995).
- . 「*In the Days of the Comet* と H. G. Wells のユートピア思想」. 『愛知県立大学文学部論集(英米学科編)』第 49 号、2000.

- , 「H. G. Wells の SF とユートピア批判」, 『Mulberry』(愛知県立大学文学部英米学科)、2009.
- 荻野美穂, 『生殖の政治学:フェミニズムとバース・コントロール』, 山川出版社、1994.
- 柿原泰、加藤茂生、川田勝編, 『村上陽一郎の科学論:批判と応答』, 新曜社、2016.
- ケヴルズ、ダニエル J. 西俣総平訳, 『優生学の名のもとに:「人類改良」の悪夢の百年』(1986). 朝日新聞社、1993.
- 阪野徹, 「村上陽一郎の科学史方法論」, 『村上陽一郎の科学論:批判と応答』所収.
- 宋洋, 『世紀末の長い黄昏』, 春風社、2017.
- 鈴木漸次, 『日本の優生学:その思想と運動の軌跡』, 三共出版、1983.
- トロンブレイ、スティーブン 藤田真利子訳, 『優生思想の歴史:生殖への権利』(1998). 明石書店、2000. (Trombley, Stephen, *The Right to Produce*.)
- 日本社会臨床学会編, 『「新優生学」時代の生老病死』, シリーズ「社会臨床の視界」3. 現代書館、2008.
- 米本昌平、松原洋子、櫛島次郎、市野川容孝, 『優生学と人間社会:生命科学の世紀はどこへ向かうのか』, 講談社、2000.
- モア、トマス 澤田昭夫訳, 『改版ユートピア』(1993). 中央公論社、1993.
- ワインバーグ、スティーヴン 赤根洋子訳, 『科学の発見』(2015). 文藝春秋、2016.